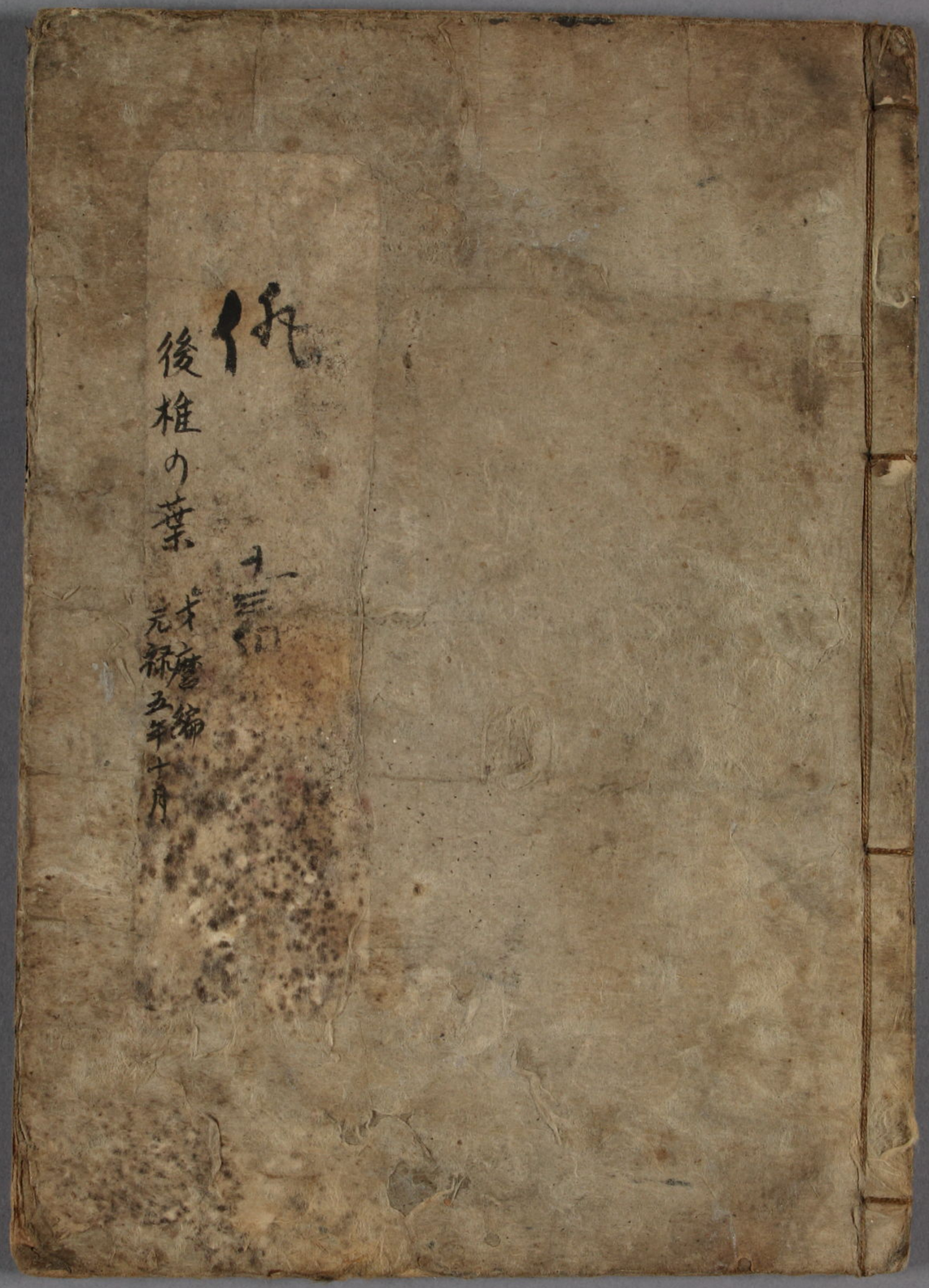

後椎の葉
十一
才麿編
元禄五年十月

初本表不

後推葉巻之上

備前の国を背西行と人行脚の第と
曳くわくしに一りのをこの窓りなく
哥といまく荷ひ出あ三月裏市の駅と
尋んとなり国の秋は青山の雁の葉よ
残しく長月の末尚りしかい西りの
をくれ行程二十里れ山途とをこ三秋かな
てやうく里山は府に入けり八幡の白はよ
辭て法りを那ほとをわと三秋のあとり
ものさあく忙然そり

一ぬ月ひ三ひ月ひ川ぬ八
小田り三落り大路鳥の声 雲鹿
君は石ス野路の川水柵山りて 脱翠
ふ小笠とをくゆりきり 八笛
馬賣り先きを定りを国の月 八山
小家垂ひて唐かく テス 麿
諸勧進煩の感つを入ぞや 鹿
ぬきの法華おはのつと合 翠

中くに忘(ワスレ)ぬやどをすてゝ笛
ゝ野の方へ曲る　水音山
あひ迄を泳助うの後放　麿
味ゝひとの風のこゝを漬　鹿
一生仮組(ミ)　霧こめて　翠
ゝゝへていく暮　見る笛
帑(ツマ)ゝりて簇(ミヤ)ゝ日の暖ゝ山
手ぬ亀(キメ)てやす月花のな　麿
下すゝれ枕ほゝきゝかけるひ　鹿

渡ゝたゝひゝ宇治のうんぢ　翠
名
亟と立ル　鯉の命のせゝ　笛
松のてゝの寒くまゝ　山
鑄(ヰ)形(カタ)彫ル吹やう土や凍ゝん　麿
閑山堂の代ゝをゝ　鹿
行の礼京ゝ　翠
田の草ゝ　笛
ゝらくゝ丸茶うゝとゝ出ゝ　山
わゝれ街(テラ)ゝ女(メ)の顔ゝ　麿

目とやりて松原筋の春月小鹿
塩断ッいりてきこゆる琴
秋盡す軍書よいむ涙して笛
ちりぬるをかつとがつてそよ切山
いとやはんたゝぬ者小雅ゝ唐
塀り重門こす町かゝれる鹿
行灯繪の唐ゝ狂いたゝ翠
ゆゝ敷ゝ月鍼ゝ笛
竹ゝゝむ乃ゝやゝ大鼓山

厭斗ゝ句ゝ毛ゝ一ゝ 秋筆

才唐七
雲鹿七
晩翠七
風笛七
凡山七
秋筆一

冬の日の曇りやすくて難堀り　雲鹿

霜とぢる塵の数なる海メ　晩翠

行くあの車のきしきしとせうけく　風笛

ちりぢりさまと笑られしよけを　梅林

霧月よ並障子の　黒容（アケボウシ）　月磨

霧（シモ）といふ煙の夜の門　鶯白

厩ぢく金商人は来ぢ　翠

酒と煩よ身を流しせ　鹿

いたもい月雪くがやもい海　林

苦しく熱（ヒヒル）　阿蘇の大嶽　笛

さて我一ちを宇佐の使わく　白

鞍も鐙も少ぢて甲裴を　磨

恥ちを世と秋柄と掘ちなち　鹿

まぐさもしけ家煙八　翠

灰ちよ能の場とち名月夜　笛

かりむちあさきちくす花　林

歯の一つなけてかちくむの雪　磨

焙爐（ホイロ）とちらて茶とくらん　白
わくるは日よりはく墨書　笛
鞦（ヒカケ）てくつ入るるる　鹿
青塚や又屐（ゲタ）出るの箱　翠
白雨うきの晴天の鶏　麿
竹の皮うきかるかんぢもを絡よきの　抹
橋を輔軒の門と塞て　白
彩（ヒカ）ぬ彩（ヒカ）ぬ埃（コミ）の　翠

けるとなるて茶の花の　麿
新（オイ）講の灯の光やわく　抹
小枝うの月のけるる梅りた　鹿
手討のわとをを只雑の凡　白
鶉好くるも四月うるるる　笛
うをくるるを町の名　鹿
行くて安宅（アタケ）の鍍（メッキ）わけて翠　翠
交てるきの昊巖の不化　麿
けるの又其花鳥の地紙賣　白

藤つゝ小任哥並ゝ　林

雲鹿六　梅林六

晩翠六　才麿六

八笛六　旧白六

ほくゝ稀ゝやもゝ可講　梅林

ゝやしゝゝかゝる寒菊　雀月白

一住居二階ゝ結構ゝ　八山

八月おくゝ枝ゝ　才麿

梅ゝ起ゝ出ハ屋ゝ　晩翠

艇ゝ　霧ゝ地ゝ山　林

妹ゝ履ゝ　白

つゝと責ゝ　山

影よりも鏡袋まつるとて　麿
伏見常盤のもとにて　翠
荷に布紙路の夢や思ふ覚　林
仕寄りも止めてうつ三ケの哀　白
角ぐまの若者とかり朝霞　山
花の香に具とうたふんしやく　麿
すほう煮るうたて薩摩の瓦やき　翠
月のうらやや夜鴉の啼　林
根ぐらを入れ水の罪の思草　白

行く人まれ松苣の古谷山
田よ春しく鉄炮一つのしかり　麿
五月の幟吹流を凡　翠
出店の奥のうつす覚　林
寝るとうたふ伊勢の四段　白
綱土ホのうきさ小足川八ケ市　山
嫌も娘と四ゆるみ　麿
初ものの初ものうつ合　翠
湯ものを河のうつ山船の坊　林

脇立よ度ひとけくれなゐ　白
借りよとやもゆかれし　山
皮草履月のこすとまちかん　磨
鱧たてり炉の川くま　翠
何者か落ち植えたかくれん　林
そよ領抗ひくげくしれ　白
うごき岩山の端りぬけて　山
いとも懼ろしー　天秤の跡　磨
庭掃ひちるひとすも重なす　翠

ひくく仏島ひとやく　嘲　子　執筆

梅林七
旧白七
凡山七
対磨七
晩翠七
執筆一

白雪のもとに花ゝ小草和

ほとゝぎす炭部屋の道　汀山

我友とうたを語りつゝ今く　才麿

ひとりさけば四つ辻の秋　雲鹿

水門より彩雲月のぼるよ　晩翠

桐の丸とゝ金うすす　李笛

燈しもやはきの実のおぼと　山

了製（アテ）めぐ風（ニサブ）ふもしてやりうり　雪

宿刈りの札押さりめ花よ　鹿

やく羞（ザ）狂（レ）出く山方の点翠

ひとゝて物の扇ひとめくも　笛

酒とほたゝ詩をえゝ山

身ぶ庚（ウツイ）居ゝもゆ（れ）ゝ雪　雪

ひとり取くの夜沼ひ切ゝ鹿

贄殿よへし震面（フクメン）ひとゝ翠

ものひ夜ぞと云ひゝ月　笛

ふきく灯の花をかけゝ　山

名

形ひ[illegible]て死の門と行く磨
かもひこし紙の弘智法 古衣 鹿
[illegible]を身の唯 法く居る 翠
賤や粥の食の汁の薬にて 笛
拝くしるかるる 覚山
及八月の色の[illegible]庭の面 磨
[illegible]と[illegible]く無憧る住 鹿
[illegible]く色す世と牛と猶されて 翠
[illegible]恨を[illegible]山 けと 笛

沒の身を上葉の磯町 山
人香[illegible]の索麺[illegible]く[illegible]ぬる 磨
[illegible]の月の比 磨
列卒亟 はく[illegible]眞野赤沢 翠
椎の[illegible]や松を根こそ高早水 笛
彗星 [illegible]加[illegible] 山
空寒く鐘楼の破戸引[illegible] 磨
[illegible]の蕭の落る音 鹿
[illegible]の下行切り 翠

袖引とすはしる子迄き　低筆

凡笛　七
風山　七
才麿　七
雲鹿　七
晩翠　七

執筆一

懷贄

未かしらはやわらくらの古衣　買　風山
未うしはやはつ時もお寺方　旧白

後撰集卷之下

[illegible]自瓶井[illegible]より消[illegible]
観音の灵場つくりて建てち院
軒[illegible]構へ八識乃福田より阿字[illegible]
密草を叢ひ[illegible]致景[illegible]
[illegible]きて金鉛山半丑乃松[illegible]
[illegible]や久[illegible]
山より郷[illegible]道曲[illegible]

寶前よりもとく便得離癡の
法文の心を
心限形くそえゆかぬ色の山
山林の閑なるか徘徊して
雪あるは狸の報きてかまん
それも所雲とつよ僧の居と
坊もあるこそうよ白と責
志の凡流を雨踈幽栖凡坐右
よ李白金陵鳳凰臺の行張

とそそそそ沈みく
白鷺の声きくとも落葉菴
くれて沈まよ雪凍う　窓　外雲
東照宮の凡山なく詳して
春よりうくうを
僧不凡催しか　才磨
十月やふたわか寺の門
落葉かうへよとそわとそれ　不凡
弓太郎けんのたゝの列引く　晩翠

恨しゆくめることわれ　知義
落くるかうの影と　西の射　如醴
わもとに　拾よ　菊に　と　凡笛
ウ
ちくくと　蔡の具とすぐ　揚ケ　狩筆
板うんうきうきうきうきれ　麿
爬むるはうすきの凡　癖　凡
腊所もとくつて　婀娜　翠
行も加茂や　貴船　とつて　義
粥とちかるまつの　毒　斬チ　醴

白山のたよれ　笛
夢窓に　遊の　虫　凡
鴛とりの　友　ゆ　水の　寂　麿
裴ゆく　孫も　爾　義
月花と　夜　伏見　車　翠
名
ゝ　嬾草の　娘　笛
口に　氣　醴
味噌　煮　麿
里藪の　中　猩　凡

市川芝居の太夫殿　宿　翠
清盛の子孫と今も聞わく　義
節をきくせぬ境内の竹　醴
ふるれまの音わくまき旅衣　笛
誰うハけてくれんど　嘆八
鍼立のかてはつるとかりくもを　磨
流るゝもしらくと義　義
橋下をとス小船は紙わく　翠
月影くまき枝本屋町　笛

躍りすくよ催をぬけ　醴
や燈ぬけくかさね惟る　義
堅さみよ生ぬるる使者男八
わるねをまるる山科の里　笛
花あれし竈の煙通ける　磨
合せ勝るる雑なくある　翠

竹下茂門句をぬけとへ
めくき日影と天くや水仙花

糸佐と人の一癖と猿麻の俤よ

吟して遠を忘れけるあ

唯まやかくかくく一巡り

多くれなる折しのうね　月麿

巨燵てそうき身の癖とぬくて

頭巾うけるる水仙　乃し　其由

遠の山新ほうつる覧　晩翠

呼ぶ紙経手きるく行引り　芦角

公家のり物とめうく燈の言　義八

月ちよ立ちもちよ玉のうぬ　一之

やけわと紙如圓柏のもりて　知義

宜孫の報とれるひ　ぬるる　狂筆

孟冬十一月於其由宅用席

下略

予一とも洛陽まく何ぬる里

ぬかなるくなかくそこ

白とわいらせれく

此国や黒ぬもうとる何ぬ　知義

花の小もとにて人々　文麿
うちさはけば暮殿の聽にて　如醴
ちやとりさす簾けとしし夜　晩翠
新しく牧屋の匂と成月哉　八笛
道もわかまてそ見れとゆき　不八
面影や月ねもすはうきこ　松筆

下略

わら目とわらく倡こゝ衣　俊律
宮ゝ須こけ冬枯乃道芝

なるもてゆく名意乃寓興
ゝ

田野眺望

雲寒一ゝ初咲ゝ郷ゝ　晩翠
生出る麦と青月女　文麿
一筋ゝ　梅林
枯こせし山も代ゝ　枯野ゝ　八笛

笹乃せゝ山ゝ木曽義仲
瀬尾太郎兼康と追蔵ゝ

所首塚なと云ところ有

五百年霜も小笹の行衛かな　晩翠

弓取の猪ひのこはれけり　寸磨

田家ふくまる芝その中に

里乃庭の人迎こし深し鷹の翼　晩翠

一の宮といふは備前の領なり
なく吉備津姫の庭しろや
宮白山を備中にわかちけるが
背ふ山社より備中の宮居へ

踏籠廻廊立ならびいさゝかよし
今をかりの假屋に建てられ
の機黒木の柱神あまへる
性わたくしあつかれ豆のこと
わしめすよしありける社人に
より急ほしのぬくわれたまはれば
まて扇ちのかゝりかたに月の
さうつゝかにわきひさるを

飛影の白うかれる尾花かな

社司をいとなむ大藤内の末裔
なる旧記　證文　数代を感ぜ
ずや外の宝物もとぼしく
山の根を廻りて帯ぶ
せばめるみし細谷川より
いはひせしもの後や
葛うれる狩谷川のほとみる郭　晩翠
輝やほそ谷川を石　なみを　月磨
なれる右備津の宮より

ゆくいけてもうれきひの中を
いつも神前より再拝して
足ずりのいとくけうしく雪景　八笛
板葺のそるさや神恵　晩翠
社を四道将軍之中西道
将軍の祭屋なれ
ほとる神一輝もつけ名来立　月磨
山氏の一きさ寒し神の森も　梅林
番すの弥宜よしの宝物を

うたとゝ上番中番下番れ
とゝ社司の方より寺方へ使
ゝ出やうけるふ賀陽兵部太夫
とゝ神主裂束製ひ来り
掌指うやく〻しく〻て〻
ら〻金幣をつりたてかく
ゝ〻れおあく大力か
とゝり出けるにゆき
抽や中よりゆり岩大臣の

扶の弓にゝ矢一ふ〻
ゝあり凡力のかゝへ
ゝ〻ゝ身の毛立程し
ゝ〻ゝ押いゝきは鉄の弓 八箇
拝殿ゝ立て
ゝ河ゝゝゝ形猪の百人一首 才磨
再興の異ゝ三百有余ふ
及ゝゝて〻ゝ苦ふゝり
破壊のゝゝれけゝひ

[illegible]百六十五の廻廊
[illegible]の十七つ[illegible]
[illegible]の神職の者八つ[illegible]
[illegible]とも七十余
家祭事を昔より敷てお
こそ[illegible]
[illegible]の[illegible]の次第 晩翠
又釜の壇と[illegible]一の神釜
[illegible]奇瑞の鳴動[illegible]

世[illegible]
釜を鳴る[illegible]なりけ[illegible]ん 広磨
[illegible]
[illegible]宮の[illegible]三月九月
[illegible]市[illegible]
[illegible]して貴賤の[illegible]
[illegible]
[illegible]の[illegible] 梅林

わりきの山とりのぼりうち
すてゝ小家に引籠
住居しけるし
雖うしてゆとゝいふりさやかに面鏡　晩翠
わり茂山
君の代の枝のおりやそ　才麿
新大納言成親のこの
を別れとゝいふ人見るとゝ云て
無憚の死とゝ行ふわとや

又逃て水紫おわしの八の音　才麿
板ゝ川とゝろとゝ信ゝ西
の方ゝ小田畔とすゝ
ゝ月やつもむさゝ山わけ
出たるもなを
月なれ
雪竹をいつゝたてゝ
夜よ入独よ寒月とゝ
ゝゝ

如醴より催されて　月磨

とゝのう蕗の芽鶯て笑ふ　如醴

雪をすかすふ雪のやうゝ　知義

皆摺しと歩をなりそ弱牽て　不凡

いのちとうゝ新酒こけり　晩翠

夕月夜障子孫子行ぬ　舩筆

秋風落く岩　柱　醴

山伏のかとのこゝとくし　磨

風のうゝさけよけを道

切り行を見よ大殿の下陶器　凡

野ゐるふをのうゝねくゝ借ス　義

玉ゐゝれ紙干板とらけりて　磨

おるの凡呂よいて昇也　翠

若宮よハ獅子とゝるもをけし　義

思ひさゝれしゝ扇ゐくなり　醴

ゐ彩ル高のゝ砂の砂車　翠

うこけいうこく月ゐゝ　凡

花笠やうれて僧の拍子舞　醴

食ふ　阪と　かたてりまし　八　磨
世と　ゝ　此除目を　七ケ国　八
ゝ　高く　し　私の　揖門　義
拾ヲ　揖と　ゝ　ゝ　雪降り　磨
揖　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　翠
辭の　ゝ　中　ゝ　ゝ　仙が　義
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　捨所　ゝ　醴
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　翠
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　着ル　八

かゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　育て　醴
屑双六の　月　ゝ　ゝ　ゝ　磨
暁の　雑　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　八
火　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　入ル　月　義
佛前　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　磨
立　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　暁の　鈍　翠
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　義
人を　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　醴
花の　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　翠

柳の出入りまで用ひる門八

病ひ[illegible]　石覚

袴[illegible]けふい神[illegible]

酒のむ[illegible]火鉢[illegible]　月磨

祐[illegible]　晩翠

後中の梅　負子の行脚とて

草鞋[illegible]杖とおもふ[illegible]

けりたす[illegible]

神云月[illegible]　梅負

折おり[illegible]　月磨

湖[illegible]　晩翠

灯[illegible]　八笛

水桶の柱の[illegible]　雲鹿

[illegible]

云すて[illegible]

又對子

須磨[illegible]　梅負

海ゝ小松山をゝりのむ峠
ゆゝなゝゆかし忠光の詠も
行其梢ゝ代雅ゝかもて
月雪の火鹿ゝ硯とわゝ
猶焼ゝ小奇ゝをおいゝ雪の夏
ゝ和ゝゝゝゝゝゝ代也

讃荘子

夏ゝもゝ氷ゝゝゝすゝゝゝ

讃茂叔

蓮ゝゝ茂叔ゝ顔ゝ蛇の如

讃昭君

瘦柳ゝゝ其白　其すゝ

讃吉野山川盃

信ゝゝゝ岩鬼ゝすゝ奥わゝん

讃鮎盃

浮鮎ゝ作ゝ冷ゝゝ中水の色

題無撥

いゝき居ゝゝゝいゝ養ゝ冬牡丹

義凡亭よまねれけるに付て
床よ花多井雅宣公題詠の
和哥とりけるに蛍座
きりぎりすの夜しくれの郭公知り
一夜知義し居話　知義
見よや世の拾よまるる寝ひ
ゆきくれ足弦たるを叫す　凝（ヰテ）　才麿
小宅（コヤケ）よる礼月の帳を出して　同
二枚屏凡の寄ゆるん　義

酒の肉舟年慶の仕形　同
瘦切りの香の中をもたるも　麿
肩巻のかしよ似合し燈の月　同
ワをもたをを覚敬の門　義

閑素と好む咄の序てか　万杏
瀧河く琵琶音ときき菴れ
地炉（スヒロ）一つ行ふ薪（タキモノ）拍　晩翠
きしよさハ海邨（カイフ）刀のあるほうち　才麿

わすれ物語句
おろく書たを変りとゝもよ

讀九相詩

こゝ形人の果を九つ灯籠哉
死してを面よ紙魚こゝろん
寿と思ひ生こゝ文

去嘯も拾ひ物ゝ銀杏哉　知義
死して正よ事とゝ
多を厭ひ生てい狂

拾得の掃拾ゝ銀杏哉　不凡

對二兩句一不昂取拾

塵箒ゝ落ゝ花や風ゝ　才磨
村ゝ雨ゝ海を渡ゝ　芦角
沖の火よ声もゝ　義凡
初雪の降りゝ　一之
義濃近江拍子合すゝきぬ哉　知静
冬枯ゝ　猿蓑朱を　雲廉
わらさんの花ゝ暑さ哉　凡笛

数を火のいりせしを深しる作り　月白
いやしけれ扇よりも書く源氏哉　梅林
作り者の提柏すん萩ちも　白英
木柏や吹とちらしく花一つ　如醴
絶柏の上手祖あるちまた哉　栄流
ちらけなや扇の一重帯　其由
馬衣の暑さどあるよ日くれ哉　后覚
きちらく吹いふ妹みちまちまち遊　是水
散るる（ヒルカホ）の花ちらしあるしし哉　枕友

口切や古代ちくよさ作茶ちさ　知純
ちりの人よおもしとかんとまり富貴　知香
幽灵ちり物ちりちいをちり弾ちさ　知秋
報ひ来く島の巣よりしし哉　機計
入月や志ちの中ちしし酒の肴　代笛
半河之柏よ木ちちや勝月　無我
君ちよ代ちの蔦ちの梅や雪ちちめ　知義
炉開さよ粥煮ちの僧ちちちく哉　不代
むちまよおちしたちちちし　盲人野草

家にしれとやうぐひすの櫻月記　松代

日中のむもりけるを一ねぶり　不貢

月の夜を屋ふたしをしの山橋　万杏

衣うくるうさぎうさぎ安うの郎　栄流

木かくれの餌さしをしの星離れ　松邑

枕して咄のをきの火燈うれ　雪弄

雞の居月ともあるの師走式　浪舟

氣とけきをきけるわれの熊代　蛍藻

白水の節をしの氷はをく鶏うれ　一水

花よの射手とうへ意猛ぶく月

手ゆきけきをしをしの甚業をて

ゑしをしろことひひきるに美の

をみ美まをして月ゆうわるる

まりをしの世の家子流ををく

て夏家ゆれ

むわををのうを面なやを向家　旧白

をを菊の霜をを何と寒牡丹　后覚

菊の香や逆さ風よせを落めく　知義

女手の菊の名よせの假字なるの　芦角

送知香

江戸なるよ我月出るなる花衣　知義

乞食の枕ひこすなるれ　舞右

九階へもりなるぬほるるか　栄求

祝産

君の代をうぶ盟あり玄の水　旧月

淋しさを聽ぬ沢のかなる沢う　如醴

食なるなる又もおうなん唐也め　千代丸

雪察の不凡り萩あるる

往なるうんかと云一駒凡者

けしなる枝のるれる遺よ

折いるる一花の種のこ

あるとなるの霜とかる孫内

あるりるれ只錦傘凡骨

と乳しなるるもし

枯萩やむの山ゆるをるのるよ　才齋

才麿また好く茶物語を述作せらるゝを
閑人鳳毛のこゝやかなるとすゝめて
鸚鵡の舌うらにむのふし吹出歯
ゆるしへして折く年のもとにおへ
しぬもとより身を落魄のゆう
くと露雨のうこゑこりり炉火まろ
らひ小牛茶鑵とうけまちり唯うえ
るはおもくところ乳のめのもとく
ぬしといふさを貞しぬ

口切とかかせこかしをたすくふ　暁翠
かく居くたろくゑゐぬちも　才麿
舩のお水棹も擢も干ゑく　旧白
数をすゝりけり大道く出ぬ　凡山
峯キたま陰さけましたの蒼の月　梅林
よこはし寒ミき秋のあるふ　雲鹿
客殿の廣さみまさす濃石葉　凡笛
心きゝ坊く酌ゝたるらん　翠

ちるを身にしるとてもむさしやや　麝
虚労をかくす嗽そうはくし　自
やまくしとあはれとやや　山
笑をまちもゆ湯殿踏未忠　林
構と氷室のむすめ　鹿
人目形多て安さ笠戸　笛
うされうる命下うる猿轡　翠
一夜ちきりの茶鼎すう　麝
きられをお黛ちれ神の月　自

草花うせくる衰きるる　秋　山
うハ霧と結い君ちる鞠ちる　林
古曽部の寺はなもこそ　鹿
椹のおを拾ゆ手　笛
ほうそつりし金延しの　翠
龍田川加ちる身はるる　麝
ちぐし命ちの鳥のおち菜　自
黒い程ちちる明神鴉　山
釜の動ちの吉俊の中山　林

門の西もゝかゝりてよもすがら鹿
新聖霊へとゝまれと泣笛
舩人月物よくもうす煙翠
汐の流もよ別れあけ瀬鶯
せたく波代駕棚うたく白
寒かるをへ戸なもち山
咋みく炬うゝ通り林
都へ町ゝ運ゝ和鹿
何ゝのゝ花の色ゝ笛

俳諧硯

執筆

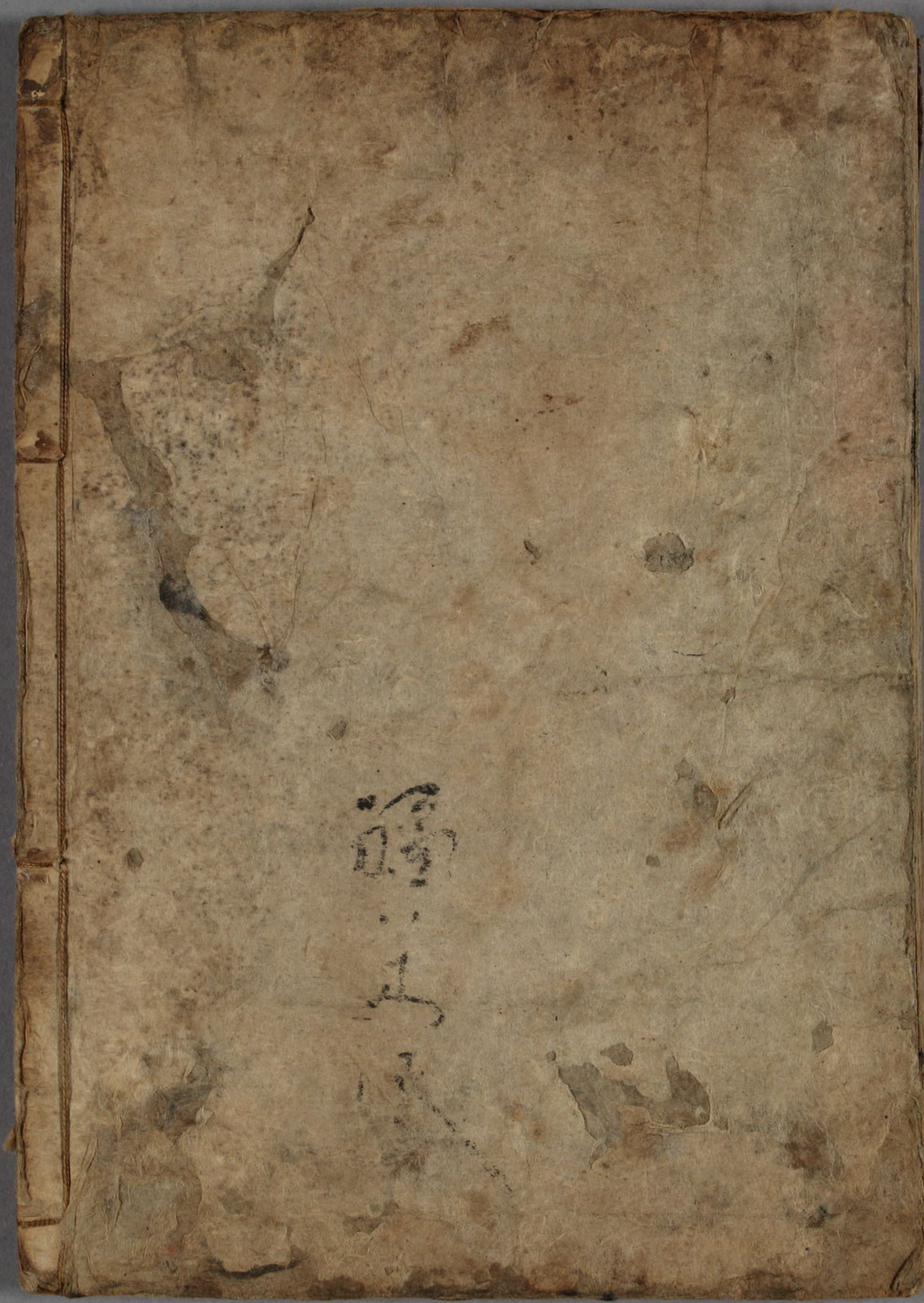
晩翠 五　梅林 五
才麿 五　雲鹿 五
旧白 五　風笛 五
凡山 五　執筆 一

元禄壬申孟冬下旬

備陽思山旅寢之灯下操筆

才麿呂

京寺町通二條上ル町

井筒屋庄兵衛板

元禄壬申（一五年）